

## （4）浸潤癌と乳癌の進展

乳管の基底膜を破壊し、乳管外に浸潤した乳癌は局所の周囲組織への直接浸潤、リンパ行性転移、血行性転移として進展します。

(a) 局所進展は、はじめは乳腺の乳管外の間質組織(脂肪組織)に広がります。乳癌自体の性格と間質(宿主側の性格)の相互の関係により、癌の境界がはっきりした球形やラグビーの球のような楕円体から、ブロッコリーのような凸凹の形、さらには、松の根が延びていくような浸潤形まで、種々あります。したがって、乳癌が“しこり”として触れる場合も、パチンコの玉、金平糖のような形から、はっきりとした“かたまり”ではなく、境界が鮮明でない、あまり堅くない硬結として触れるようなものまで種々雑多です。これらは、病理学的(顕微鏡で観察したとき)には、それぞれ、充実腺管癌、乳頭腺管癌、および硬癌であることが多いようです。このような組織型の違いは癌の性格にある程度関係し、乳癌の再発や死亡に関係しています。なお、病理学的には、特殊型として、粘液癌、髄様癌、小葉癌、などがあります。

局所進展として、乳癌の浸潤が皮下脂肪組織やクーパー靭帯(乳腺組織を皮下や乳腺内で吊り上げている線維)に及ぶと、その表面の皮膚や乳頭が牽引され、皮膚陥凹や乳頭陥凹といった症状が出てきます。その初期には、えくぼ症状(dimpling)として、親指と人差指で“しこり”の表面を軽く寄せると、中央部にしわがよります。これは乳癌の診断法として昔から有名なものです。

さらに、乳癌の浸潤が皮膚に直接達すると、皮膚浸潤、皮膚の潰瘍が形成されます。特殊なものに、皮膚全体が発赤、腫脹し、オレンジの皮のようになる炎症性乳癌がありますが、癌細胞が皮下の毛細血管やリンパ管に侵入、塞栓するため、予後(生存率)が非常に悪いものです。

乳癌の浸潤が乳房の下部の筋肉、胸壁に浸潤すると、乳房が胸壁に固定され、さらに進むと、胸膜に達し、または胸壁全体が鎧(よろい)のようになります。

特殊な乳癌に、乳頭の乳管開口部に発生したパジェット(Paget)病があります。乳頭部が発赤、落屑し、湿疹のようにただれて、糜爛や潰瘍となり、滲出液や血液がみられます。

乳腺内にはリンパ管、血管が網状に豊富に分布し、間質に浸潤した癌細胞はリンパ管、血管内に侵入し、転移します。